

白老元陣屋を描いた絵図面



『仙台藩白老陣屋之図』

はじめに

安政元(1854)年、ロシアなど外国からの侵略を警戒した江戸幕府は、蝦夷地（北海道）のうち、松前地を除く大部分を東北地方の藩に分けて警衛させる（守らせる）こととしました。

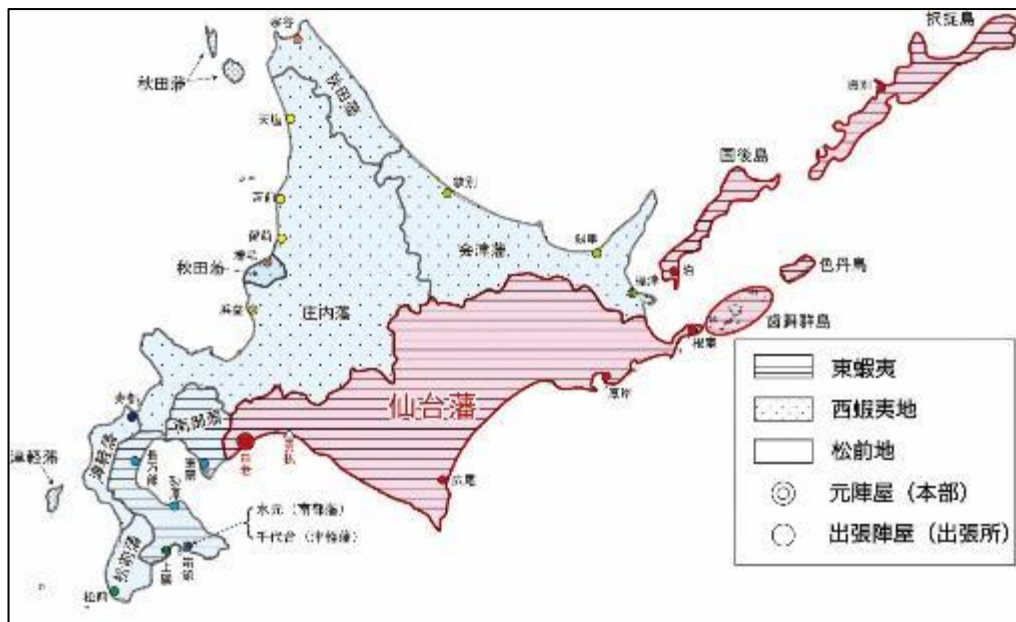
白老から択捉島までという広い範囲を担当することになった仙台藩は、その本部を白老に決めて、安政3(1856)年に元陣屋を築き、戊辰戦争の起こる慶応4(1868)年までの12年間、約120人の藩士たちが入れ替わりで、蝦夷地を守る仕事をしました。

昭和41(1966)年に「白老仙台藩陣屋跡」として史跡（歴史上とても重要な場所）に指定された後は、白老町が陣屋跡の保存管理と整備を進めてきました。

昭和59(1984)年には、史跡の本質的価値（大切な価値）を伝えるガイダンス（案内）施設「仙台藩白老元陣屋資料館」を建て、その歴史や資料を展示公開しています。

また、史跡を確実に将来へ残すとともに、多くの来訪者にその価値を分かりやすく伝えていくため、白老町教育委員会は令和3(2021)年3月に『史跡白老仙台藩陣屋跡保存活用計画』をまとめました。

本冊子は、その計画に伴って調査された陣屋跡に関する絵図面をまとめ、分かりやすく紹介するために作成しました。



各藩が警衛を担当した地域（赤色は、仙台藩が担当した地域）

1 白老元陣屋の歴史

(1) 白老元陣屋構築に至る時代背景

幕府から東蝦夷地大半の警衛を任された仙台藩は、安政2(1855)年6月に家臣の三好監物ら調査団を現地に送り、土地の様子などを調査させました。

当初、幕府は苫小牧市の勇払に本部を置くよう指示しましたが、次の理由などから、箱館奉行所により、仙台藩が白老に元陣屋を築くことを認められたと考えられます。

- ① 勇払は広い原野で湿った土地であるが、白老のこの場所（ウトカンベツ）は北が山で東西に川と丘があり、守りやすく、攻められにくい地形をしている。
- ② 仙台藩に協力的だった商人の野口屋又蔵が任されていた白老場所（漁場兼交易所）があり、海に近く波も比較的穏やかで、仙台や箱館（函館）との交通もより便利になる。
- ③ 大きなアイヌコタンがあり、元陣屋を築く際や暮らしの上でもアイヌ民族の協力が期待できる。

(2) 白老元陣屋の建設

藩士たちは、安政3(1856)年3月から元陣屋建設地の樹木伐採や、土地を平らにする工事を始め、9月3日には主な建物の骨組みができ、そのお祝いでシラライ(白老)の人たちにもお酒を配ったという記録(『蝦夷地御用日誌』)が残されています。

翌年9月18日に建物7棟、蔵と馬屋各1棟、門2基が完成し関係者にお酒が出されていますが、その席にはアイヌ民族が約150人いたと書かれています(『御預足軽岡元武治日記』)。

建設にかかった費用は約4,000両と言われ、1両10万円で計算すると、現在のお金で約4億円になります。

(3) 白老元陣屋での生活

藩士たちは、日頃から外国との戦いに備えた訓練などを行う一方で、正月3日には年の初めに狩りや武術の訓練をする「御野始」、7月10日に塩釜神社の例祭、8月15日に八幡神社の神事など、仙台にいるときと変わらない行事なども行っていました。

安政6(1859)年9月27日に警衛地が仙台藩の領地として認められましたが、仙台では凶作が続く藩の財政も悪くなったため、陣屋を運営していく経費も減らされ、藩士たちの厳しい生活は続きました。

(4) 白老元陣屋の解散

慶応4(1868)年1月に薩摩藩や長州藩などが結成した新政府軍と旧幕府軍の戦い(戊辰戦争)が始まり、仙台藩は旧幕府軍側に加わりました。

7月18日、新政府軍が箱館を出発して白老に向かったことを聞いた藩士たちは、その日のうちに元陣屋から退くことを決め、戦うことなく仙台へ帰りました。こうして、白老元陣屋は約12年間の歴史を終えます。

(5) 明治時代以降の白老元陣屋

白老は、明治2(1869)年8月から同5(1872)年4月の間、明治政府の命令で一関藩が支配し、元陣屋の建物も壊され、人々は少しずつその記憶を失っていきました。

しかし、同39(1906)年になって、地域の方が草むらに隠れていた藩士の墓を発見したことをきっかけに「青葉会」が結成され、藩士の供養や塩釜神社例大祭などが始められ、元陣屋の保存にも関心が寄せられるようになりました。

大正5(1916)年8月には北海道大学の河野常吉が調査を行い、『北海道史附録地図「白老の仙臺陣屋址」』として紹介したことで、元陣屋の史跡指定への道が開かれました。

昭和3(1928)年、国は史蹟名勝天然紀念物保存法に基づき、元陣屋を史跡に仮指定するという方針を白老村に伝え、同5(1930)年6月22日に仮指定しました。

同29(1954)年11月、白老町は国から専門職員を招いて正式な史跡指定に向けた各種の調査を行い、その成果を基に89,957.4㎡の範囲を史跡指定地とする申請書類を提出し、同41(1966)年3月3日に史跡に指定されました。

その後、さらに必要な範囲などが追加され、現在の指定面積は353,630.48㎡になっています。

2 白老元陣屋の絵図面

今までに確認されている絵図面のうち、元陣屋やその周辺を描いた17枚と、建物の平面図7枚を紹介します。

これらが作成された順番などに注意しながら検討を進めたことで、元陣屋が作られていく経過や、その当時の藩士たちの生活の様子、思いなどが分かってきました。

No.	資料名	制作年	寸法 (cm)	所蔵
1	白老之圖	安政2(1855)年秋まで	79×81	仙台藩白老元陣屋資料館
2	白老元陣屋下絵	安政2(1855)年秋頃	113×133	
3	白老御陣屋下図	安政2(1855)年秋頃	71×39	
4	白老陣屋図	安政2(1855)年冬	72×55	
5	白老陣屋秣場所繪圖	安政3(1856)年5月頃	77×51	宮城県図書館
6	白老陣屋地所繪圖	安政3(1856)年5月頃	77×53	
7	白老元陣屋地所御引渡之繪圖	安政3(1856)年5月頃	71×50	仙台藩白老元陣屋資料館
8	白老元陣屋地所の図	安政3(1856)年5月頃	70×55	
9	白老元陣屋之図	安政3(1856)年春頃	117×143	
10	シラライ元陣屋絵図	安政3(1856)年春頃	132×145	仙台市博物館
11	白老元御陣屋之圖	安政3(1856)年春頃	133×147	宮城県図書館
12	仙台藩蝦夷地白老御陣屋図	安政3(1856)年春頃	145×119	函館市中央図書館
13	仙台藩白老御陣屋詳細図	安政3(1856)年春頃	82×59	
14	仙台藩白老陣屋之図	安政4(1857)年9月	128×75	仙台藩白老元陣屋資料館
15	仙台藩白老元陣屋之図	安政4(1857)年9月以降	74×47	北海道博物館
16	鹿狩之大略図	安政7(1860)年1月	115×58	
17	仙台藩白老陣屋図	安政～慶応	86×61	もりおか歴史文化館
18	白老陣屋長屋・蔵・厩圖(全7枚)	安政3(1856)～同6(1859)年	28×37など	宮城県図書館

白老元陣屋ってどんなところ？

元陣屋は、白老自衛隊駐屯地に行く道路の左側（西側）にあり、北は高速道路のあたりまでの地域になります。

史跡として指定されている場所は、土塁で囲まれた内曲輪うちくるわと外曲輪そとくるわや塩釜神社しおがま・愛宕神社あたごのある丘、藩士の墓地のあたりです。

広さは土塁のある範囲（内曲輪・外曲輪）だけでも約66,000㎡あり、札幌ドームの広さが約55,000㎡なので、それより広い範囲に土塁や堀割を築いた藩士やアイヌの人たちは、大変な苦勞をしたことでしょう。



警衛の拠点として優れた土地であることを説明する絵図面

しらおいのず No. 1 『白老之圖』

当初、幕府は勇払に元陣屋を置くよう指示しましたが、三好監物は現地調査の結果から安政2(1855)年10月に元陣屋を白老とするよう提案しており、その説明用に描かれた絵図面と考えられます。

北側にシキウ・シライイ・イニワ(恵庭岳)・タルマイ(樽前山)の山々が描かれ、東に湖沼、西にシライイ川(白老川)、南は海に向かって開けた地点が建設予定地の「本陣見込」

【①】とし、交易場所の「白老会所」【②】やアイヌコタンを示す「蝦夷ヤ」【③】、海の深さや舟を泊める方法【④】、箱館からの交通手段と距離【⑤】などの書き込みも見られます。

「本陣見込」の位置がウトカンベツ川の左岸(東側)にある点が現状と異なっています。

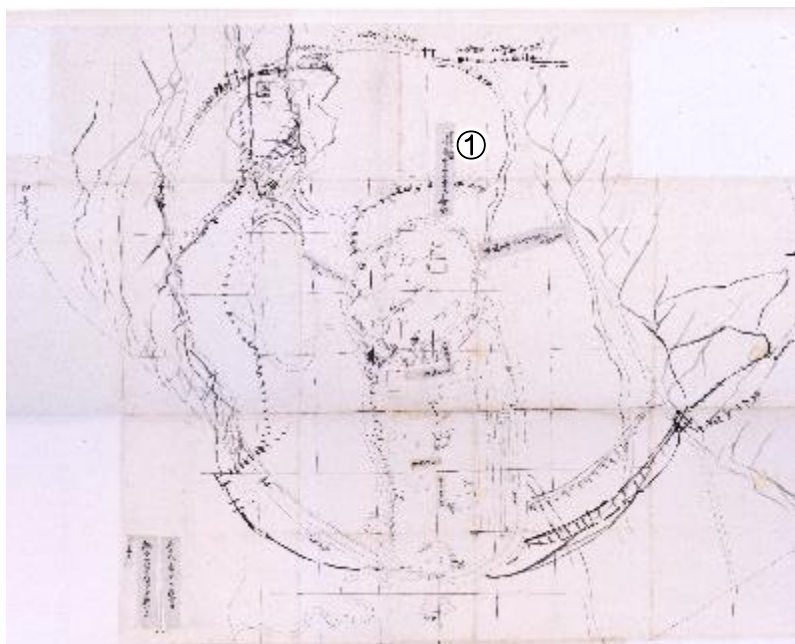


元陣屋の土地の広がりを示し、陣屋構えを決めるための絵図面

しらおいもとじんやしたえ No. 2 『白老元陣屋下絵』

三好監物の子孫が伝えてきた絵図面で、30間(約55m)の柵目で区切られ、土塁の長さなども書き込まれていることから、現地測量を終えた後、土木工事を始める前の時期に描かれた設計用の図面と考えられます。多くの線が重ね書きされ、後から貼られた書き込みもあって、土塁や門の配置など、現状とは異なる点多くあるため、まだ様々な検討が行われている途中であることが分かります。

【①】の書き込みから、土塁は「土居」、ウトカンベツ川は「新川」と呼ばれていたことが分かります。また、ウトカンベツ川から堀割へ水を流し、フシコウトカンベツにつなぐ予定があったことも分かります。

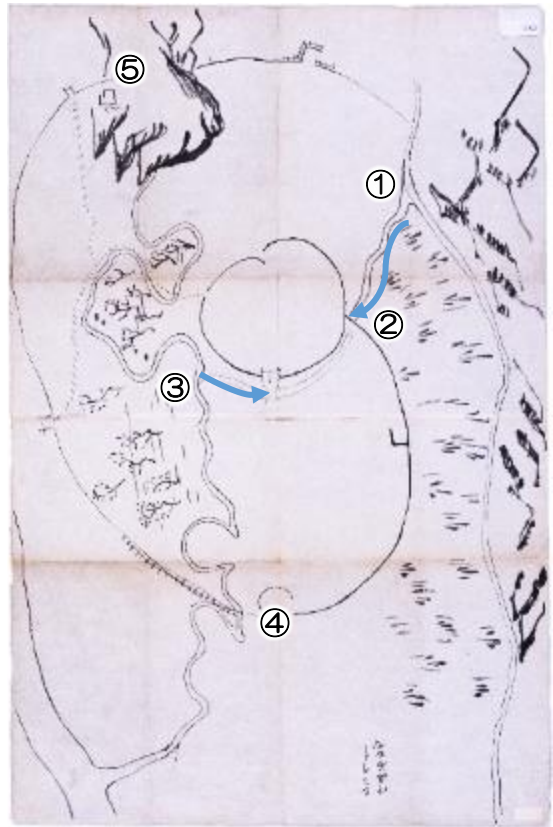


元陣屋の構造が固まった頃の絵図面

No. 3 『白老御陣屋下図』 しらおいごじんやしたず

比較的簡単な絵図面ですが、東側のウトカンベツ川【①】から堀割【②】へ水を引き入れ、フシコウトカンベツ【③】につなぐための計画ルートや、大手の円形虎口（出入り口を守るための構造）【④】、四方の門と火薬庫【⑤】など、ほぼ現状通りの姿が描かれており、だいぶ設計が進んだ段階で描かれた絵図面であることが分かります。

仙台藩が築いた出張陣屋は全て四角形の構えなのに対して、元陣屋は円構えを基本としていた点が大きな特徴で、少ない労力で最大限の防御効果を得るための工夫です。また、危険な火薬庫が、もっとも人の近寄らない曲輪から遠く離れた丘の陰に築かれていることにも注目です。



元陣屋各部分の名称などが決められた絵図面

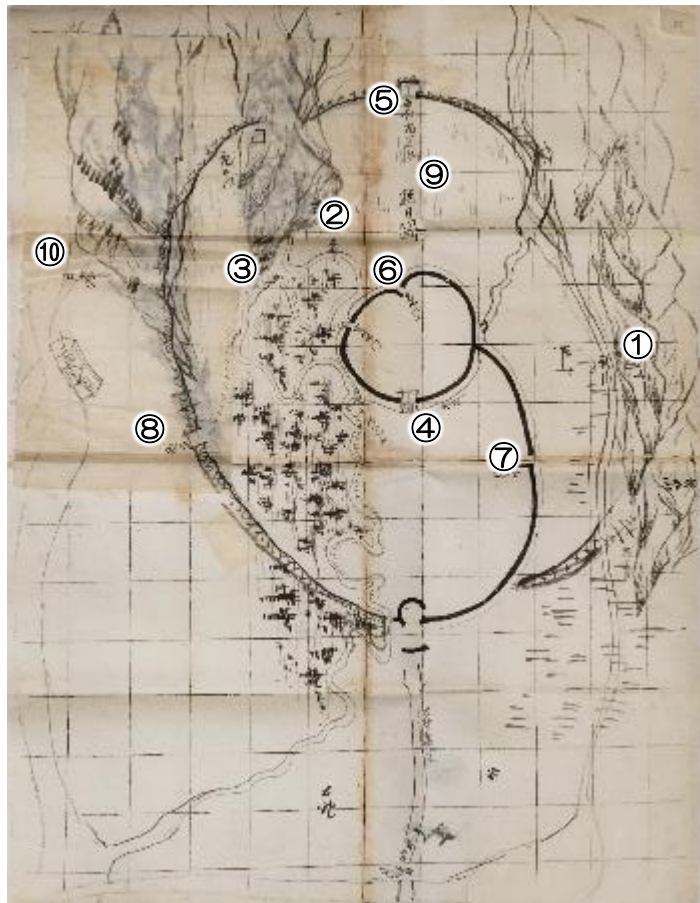
No. 4 『白老陣屋図』 しらおいじんやず

No. 2と同様に柵目で区画され、図の構成はNo. 3と同じです。

川や門、周辺の施設の命名を主な目的としており、ウトカンベツには「新川」【①】、フシコウトカンベツには「岩井川」【②】と「宮川」【③】、内曲輪南の堀割には「中川」【④】という名称が付けられていたことが分かります。

北には「裏物見御門」【⑤】、内曲輪北に「裏御門」【⑥】、外曲輪の東に「巽御門」【⑦】、西に「西御門」【⑧】があります。

また、「照日岡」【⑨】や「月峰」【⑩】などの書き込みがありますが、これは松浦武四郎が『東蝦夷日誌』で三好監物の功績の一つとして紹介した、白老元陣屋の美しい景色「旭岡十景」の構想が、この時点で既に得られていたことを示しています。



元陣屋の土地を受け取るために作られた絵図面

しらおいじんやまぐさばじしょえず No.5 『白老陣屋秣場地所繪圖』

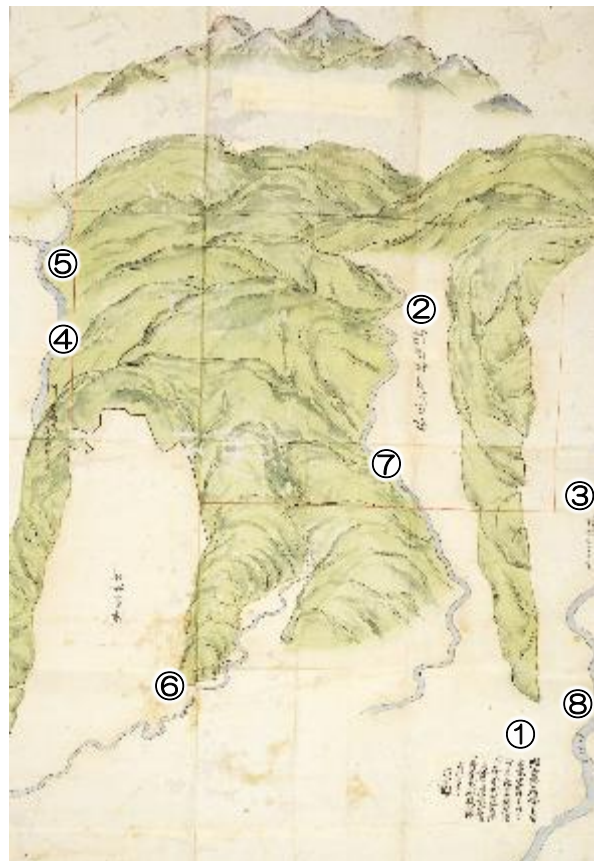
No.5とNo.6は、仙台藩が箱館奉行所から元陣屋の土地を引き渡されることになったため、安政3(1856)年5月5日に作成した「御請書案」に添えられた絵図面です。

右下に図の説明【①】があり、No.5とNo.6がセットであり、「御請書」の写しと絵図面2枚が添えられていることが書かれています。

本図は仙台藩の秣場(馬の飼葉や薪などを自由に採る場所)の範囲を示すことが目的で、「朱点之内秣場地所(朱点の中は秣場の土地)」【②】と書かれています。

右下のベツベツ川(別々川)【③】と左上のシライ川(白老川)【④】沿いに杭の絵が描かれ、「此所榜示杭 是ヨリ川ニ沿ヒシライヒ山迄(ここに杭を示す ここから川に沿ってシライ山まで)」と書かれており、秣場の範囲は東西が白老川と別々川の間で、北はシライ山(白老岳)までであったことがわかります。

また、シライ川【⑤】とウトカンベツ【⑥】、シヤダイ川【⑦】・ベツベツ川【⑧】の書き込みがあることにも注意しておいて下さい。



しらおいじんやじしょえず No.6 『白老陣屋地所繪圖』

No.5とセットになる絵図面で、こちらは元陣屋地所(陣屋の土地)の範囲と、人留山(アイヌ民族が自由に狩猟等を行える範囲)を示すことが目的です。

朱線で囲まれた範囲が元陣屋の地所で、約37万5千坪(1,237,500㎡)ありました。その外側、東西に朱点線で囲まれた範囲に「朱点之内人留山(朱点の内側は人留山)」【①】と書き込まれています。

両図を見比べると、元陣屋地所がある平地部分の形が違っていたり、両側にある丘の形も異なっていたりしますが、示したい範囲の広がりが違うので、あまり気にしなかったのかもしれませんが。

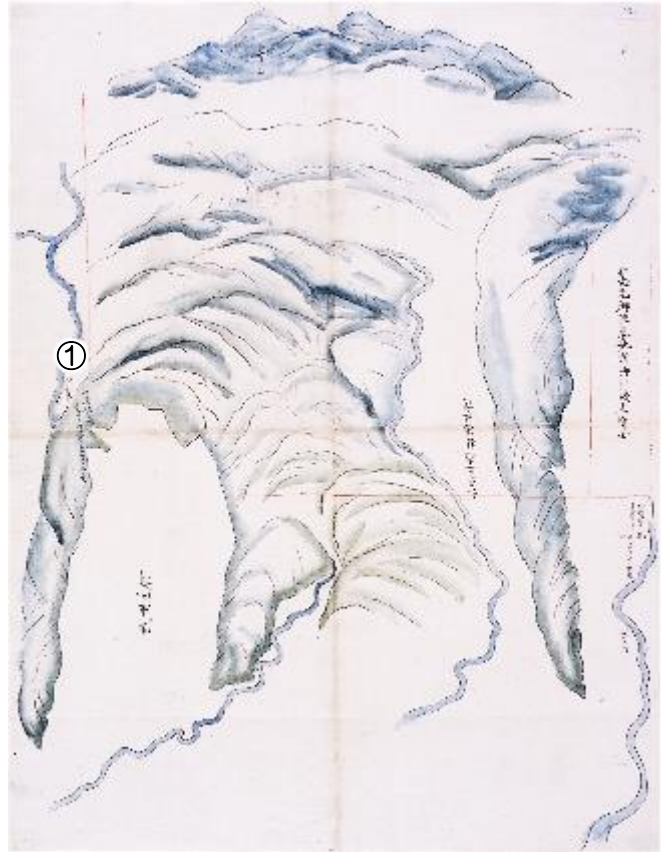
また、白老川に接した部分では「秣場」と「人留山」の範囲が重なっているところもあります。ここでは藩士とアイヌ民族が互いに譲りあいながら、狩りや山菜を採取したりしていたのでしょう。



しらおいもとじんやじしょおんひきわたしのえず
No. 7 『白老元陣屋地所御引渡之繪圖』

本図とNo.8もセットになる絵図面で、本図はNo.5と同じ構図で描かれています。

しかし、No.5に「シラライ山道」と記されている部分が「シラライ山道」【①】と誤って書かれていることや、杭と朱点線の関係が合っていないため「秣場」の範囲が杭より南に広がっていること、「シラライ川」や「ウトカンベツ」、「シャダイ川」の書き込みが抜け落ちている点から、No.5が原本で、本図が写しであることがわかります。

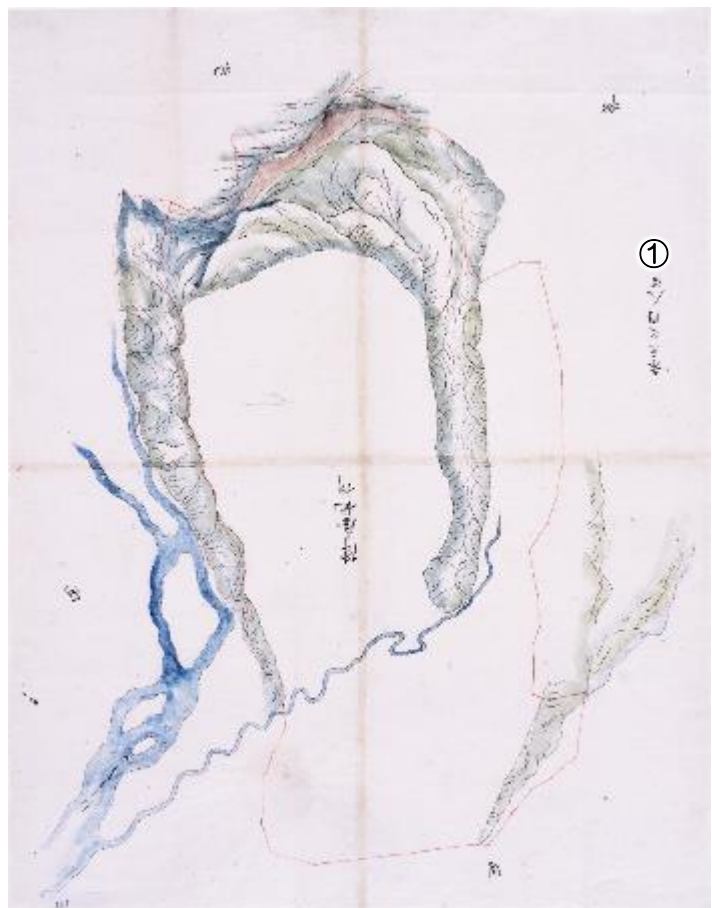


しらおいもとじんやじしょのず
No. 8 『白老元陣屋地所の図』

No.7とセットになる絵図面で、本図はNo.6と同じ構図で描かれています。

しかし、No.6では「朱点之内人留山」と記されている部分が「朱点之内人留」【①】となっているほか、「人留山」の範囲を示す朱点線が東側には描かれていないことから、No.6が原本で、本図が写しであることがわかります。

なお、No.5【①】の説明と、それぞれの図のタイトルから考えると、No.5とNo.6が箱館奉行所に提出するもので、No.7とNo.8は手元に残す図であったと考えられます。

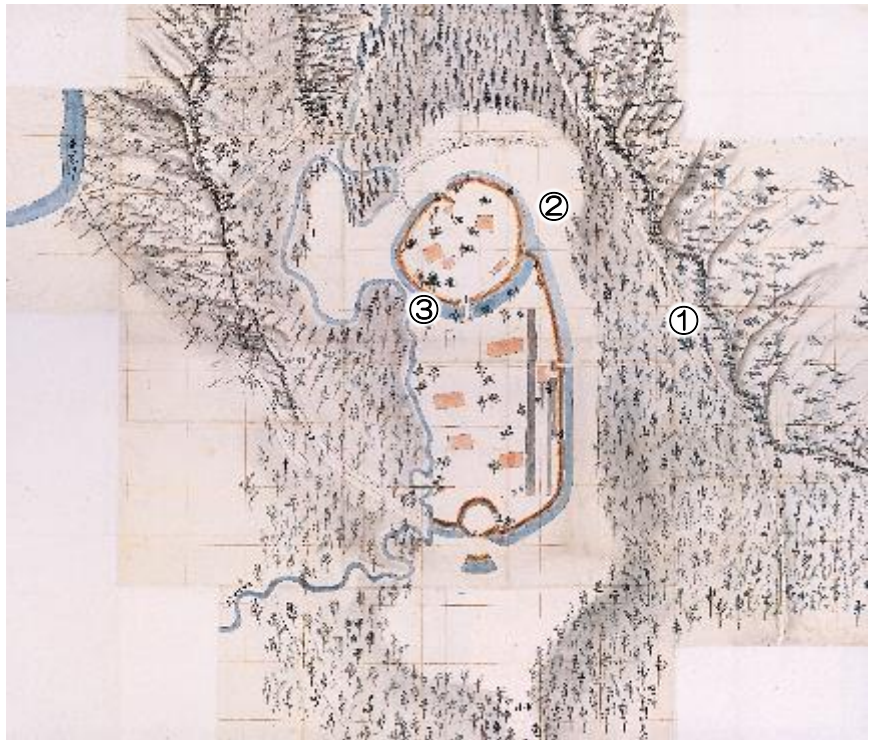


No.9 『白老元陣屋^{しらおいもとじんやのず}之図』

No.9からNo.12 までは元陣屋の建物が建てられ始めた安政3(1856)年春頃に描かれた設計図で、本図は30間(約55m)四方を示す朱色の柵目で区切られています。

色が塗られている部分は既に確定済みで、色が塗られていない部分は未確定の施設を示すと考えられます。

東の丘沿いを流れるウトカンベツ川【①】は未着色で、曲輪の堀割【②】とつながっていません。一方で、堀割とフシコウトカンベツをつなぐ地点に水位を調整するための仕掛け【③】があることから、この時点ではこちらから堀割へ水を引き入れることが検討されていたようです。

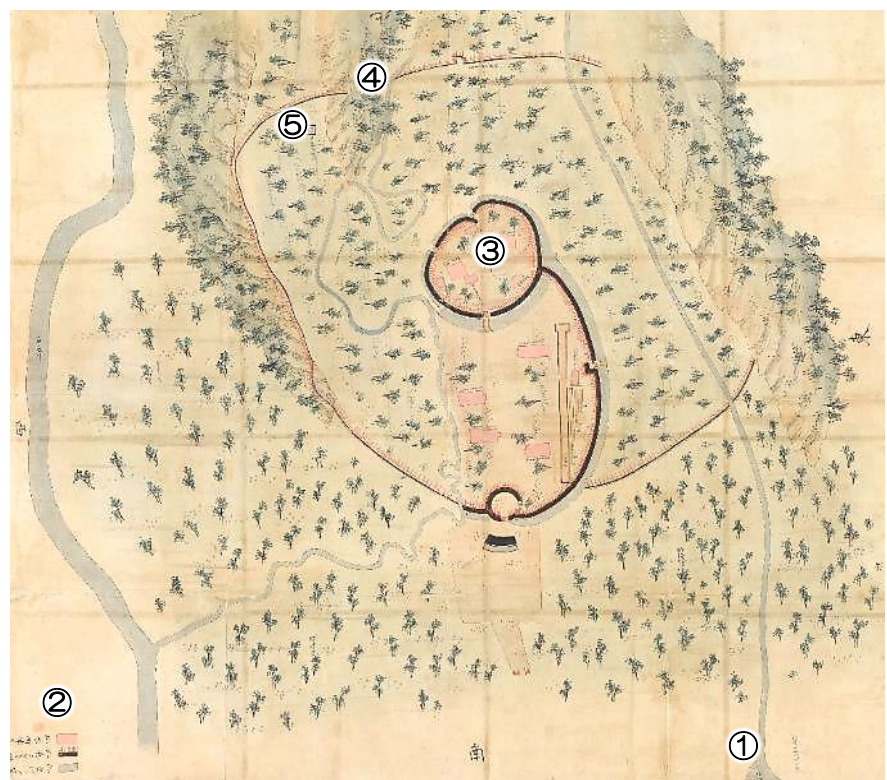


No.10 『シライ元陣屋^{しらおいもとじんやえず}絵図』

構図はNo.9『白老元陣屋之図』とほぼ同じですが、ウトカンベツは右下の「古沼」【①】に注ぐまでが描かれています。

施設の全てに色がついており、左下【②】に「此色^{このいろ}御陣屋(この色は陣屋)」「此色^{このいろ}土手并柵(この色は土手と柵)」「此色川并堀(この色は川と堀)」という説明が書かれています。

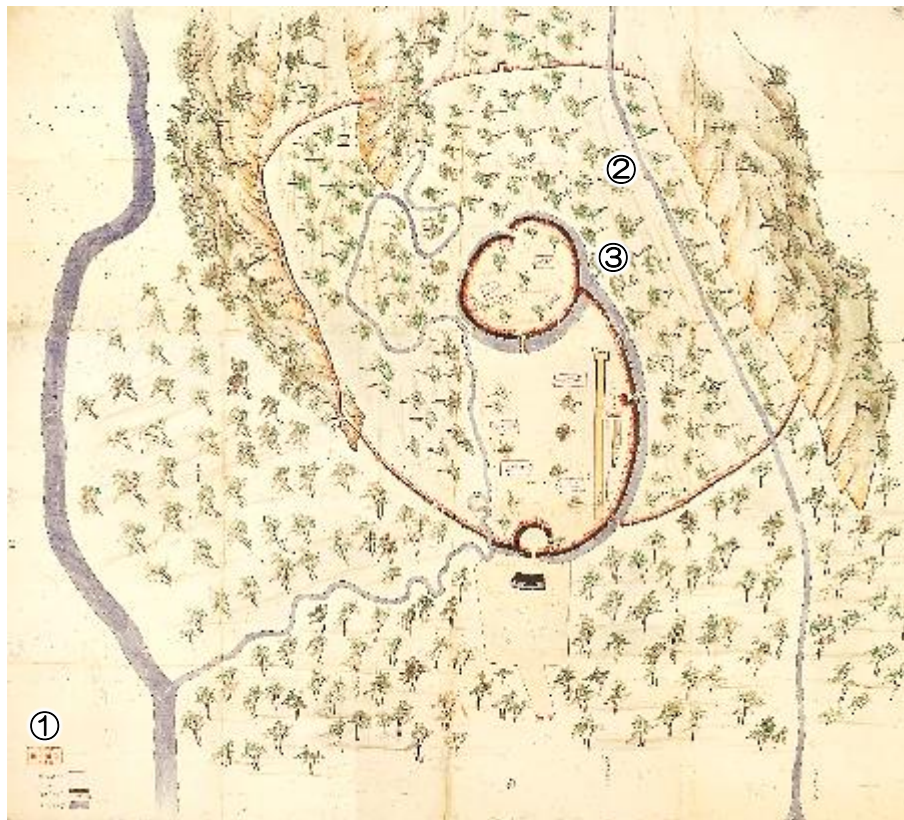
「御本陣」【③】、「塩釜社」【④】、「火薬御蔵」【⑤】などの施設名や大きさなどが書かれていますが、東側の丘には「愛宕神社」がまだ描かれていません。



No.11 『白老元御陣屋之圖』

宮城県指定有形文化財「蝦夷地関係絵図」として保存されていた1枚です。

構図はNo.10と同じで、左下【①】に「此色御陣屋」「此色土手并柵」「此色川并堀」の書き込みもありますが、ウトカンベツ川【②】と内曲輪及び外曲輪が接する部分【③】の堀割に水の入った突起が見られることから、この時点で、ウトカンベツ川から堀割へ水を引くことを検討していたことが分かります。



No.12 『仙台藩蝦夷地白老御陣屋図』

函館市に残されていたことから、箱館奉行所への説明用に使われたものと思われます。No.9と同様の柵目で区切られており、着色された部分と未着色の部分があります。

本図はNo.11で突起になっていた部分につながり【①】、初めてウトカンベツ川から堀割に水が引かれていますので、元陣屋の完成に近い時期に描かれた絵図面であると考えられます。



藩士の配置を決めるための絵図面

No.13 『仙台藩白老御陣屋詳細図』

図中に描かれている建物の大きさや人員配置が、安政3(1856)年の5月に書かれた『蝦夷地警固御人数調』という文書の内容と一致していることから、その頃に描かれたことが分かります。

『御組松前蝦夷地警固御用被仰付候二付諸事勤番留帳』に、一の宮(塩釜神社)は4月19日に出来ていたものの、曲輪内には仮の建物しかなかったことが描かれていますので、これは建物が完成した後に藩士をどう配置するかを決めるための図面だということが分かります。

また、内曲輪と外曲輪を結ぶ位置にある「表御門」【①】や「大手御門」【②】の形が分かりやすく描かれ、その間の距離は200間(360m)と書かれています【③】。

土手(土塁)は幅や高さの違う2種類があると書かれ【④】、曲輪の南外にある「遠之御門」【⑤】の脇には「仙臺元陣」の標柱があります。

陣屋南東側の水路には「ホリナリ」【⑥】という名前が付けられ、海岸から元陣屋までの距離は23丁(約2.5km)、「但御出来二不罷成候」と書かれており、このホリナリも未完成だったようです。



No.14 仙台はんしらおいじんやのず
『仙台藩白老陣屋之図』

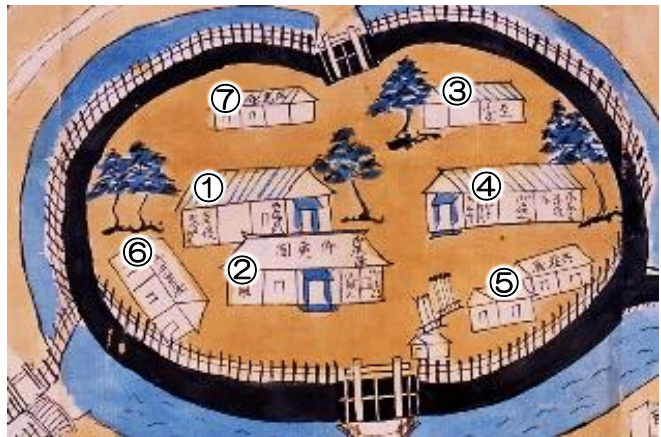


本図は平成 20(2008)年に、宮城県丸森町の旧仙台藩土蔵から発見されました。

安政 4(1857)年 9月 16 日に行われた箱館奉行視察の説明用に描かれたもので、視察に同行した玉蟲左太夫の『入北記』に「陣屋ノ形状ヲ一見セシニ營柵 向大抵出来ス」と書かれていることから、この時点で元陣屋がほぼ完成していたことが分かります。

内曲輪の中央にある御備頭(元陣屋の隊長)の住まい【①】と仕事場である「御本陣」【②】は、No.13 図に描かれているとおり渡り廊下でつながり、庭も作られていました。

内曲輪には、他に北東部に大工小屋【③】、東側に勘定所頭取(会計責任者)や作事方(設計係)・大工方(工事係)の建物【④】、南東部に東西 2 棟の「兵糧蔵(食糧庫)」【⑤】、南西部に「御兵具蔵(武器庫)」【⑥】、北西部に「御馬屋」【⑦】があります。また、内曲輪と外曲輪を隔てる堀割には「太鼓橋」【⑧】が架けられています。



内曲輪拡大図 (No.14)

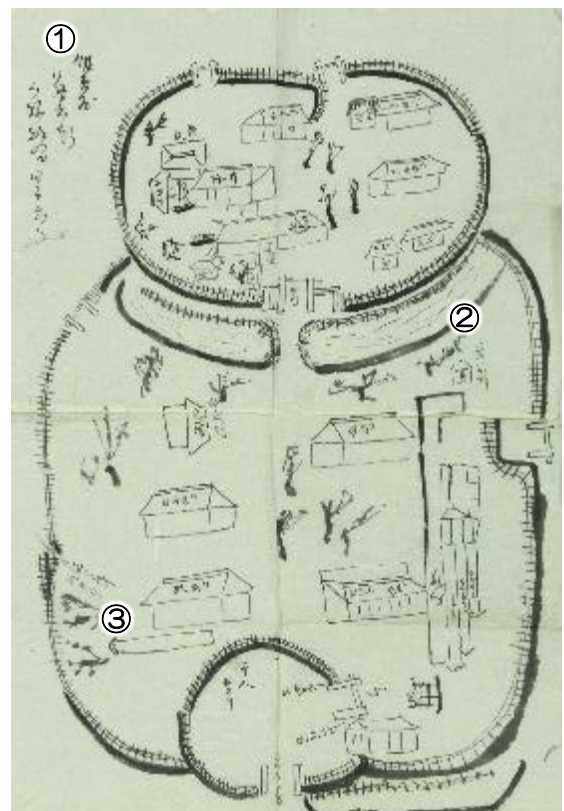
外曲輪中央付近に御目付(監視役)や医師、足軽(兵隊)などの宿舎である「長屋」【⑨】～【⑫】が建てられ、東側には軍事訓練を行う「馬場」・「的場」・「稽古屋」などの施設【⑬】が設けられています。

『御組松前蝦夷地警固御用被仰付候二付諸事勤番留帳』に、長屋などの建物が 9月 11 日に完成して 12 日に藩士たちが引っ越したことが書かれていますので、奉行の視察にギリギリ間に合ったことが分かります。また、視察に伴う臨時の施設として外曲輪南西部に「御見分所(視察をする場所)」【⑭】が置かれ、虎口の外には「箱館御奉行御覧場 并 御役人詰所(箱館奉行や役人用の待機所)」【⑮】などが設置されています。

一方、外曲輪にある「巽御門」【⑯】から東の愛宕山【⑰】へ通じる道があり、その途中に鳥居、山頂に建物が描かれていることから、この時点で「愛宕神社」が建立されていたことが分かります。

No.15 『仙台藩白老元陣屋之図』

旧仙台藩士が保存していた資料で、「蝦夷地御警衛人数都合四十六人」という書き込み【①】や、外曲輪の北東部に「火薬小分所(小さい火薬庫)」【②】が、南西部に「星場(鉄砲の訓練場)」【③】があることから、安政 4(1857)年 9月に行われた箱館奉行所による元陣屋視察以降に制作されたものと思われる。

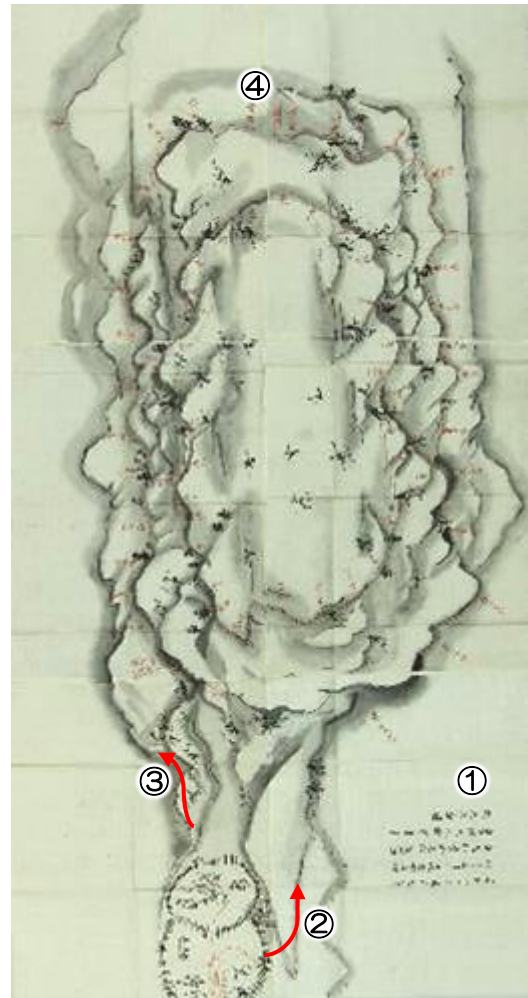


しかがりのたいりやくず
No.16 『鹿狩之大略図』

【①】の書き込みから、安政7(1860)年1月3日に正月恒例の訓練行事として行われた鹿狩りの様子を描いた図であることが分かります。また、万延元年と改元されたことが書かれていますので、今の暦で1860年4月8日以降に描かれたこととなります。

白老元陣屋では、藩士が二手に分かれ東隊は「巽御門」【②】から、西隊は「宮川御門」【③】から出発し、北の山中に置かれた隊旗【④】の下で合流してから別のルートに戻っています。真冬の蝦夷地で、これだけの距離を往復して狩りをするというのは、とても厳しい訓練だったことでしょう。

この行事には勢子(せこ) (鹿を追い出す係)としてアイヌ民族も参加し、得られた鹿肉は彼らにも分けられたとの伝承が、満岡伸一の『アイヌの足跡』に書かれています。アイヌ民族の知識と経験がなくては、とてもこの行事を続けることはできなかったと思います。



せんだいはんしらおいじんやず
No.17 『仙台藩白老陣屋図』

他の絵図面には見られない堰(せき) (水の流れをコントロールする施設)【①】や、堀割にかかる水車設備【②】が見られ、門の構造なども詳しく描かれています。建物の配置が違い、これまでの各種調査では確認できていない建物も描かれています。

桜や松、柳といった樹木もきれいに彩色され、杖をつく老人【③】や鹿の姿【④】なども加えられているので、実用の絵図面ではなく、鑑賞用に描かれた絵画と考えられます。

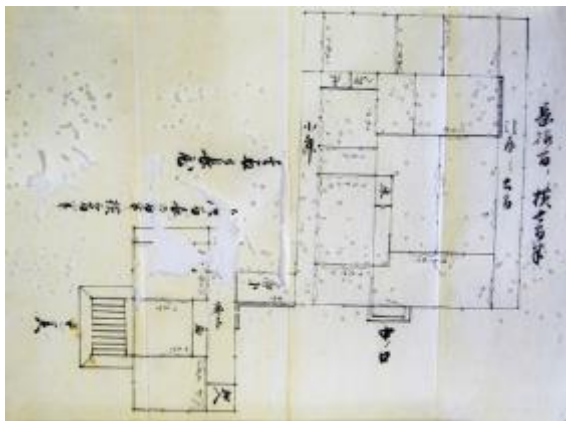


建物の間取りを描いた絵図面

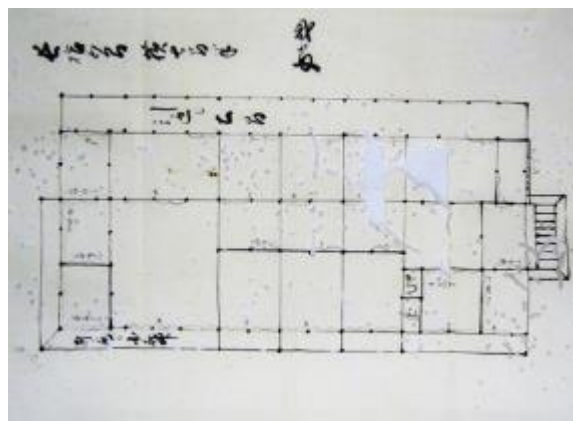
No.18 『白老陣屋長屋・藏・厩圖』

宮城県指定有形文化財『蝦夷地関係絵図』に収められている建物の設計図です。

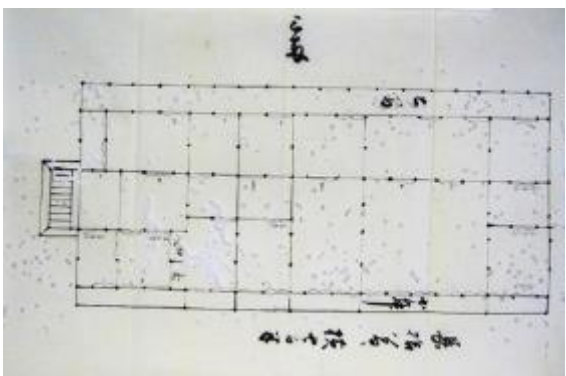
建物の基礎を表す「●」黒点間の距離は1間（1.8m）になっていて、この図を参考に発掘調査を行ったところ、長屋の規模などがほとんど一致しました。



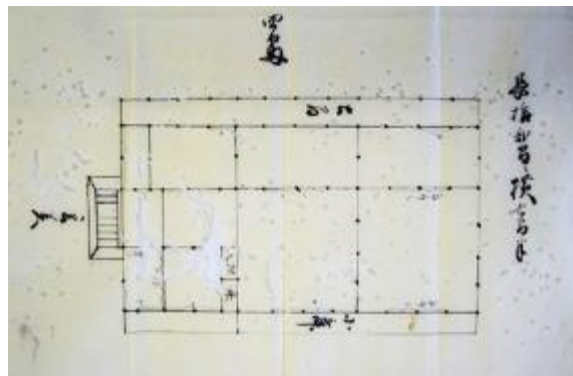
①御本陣



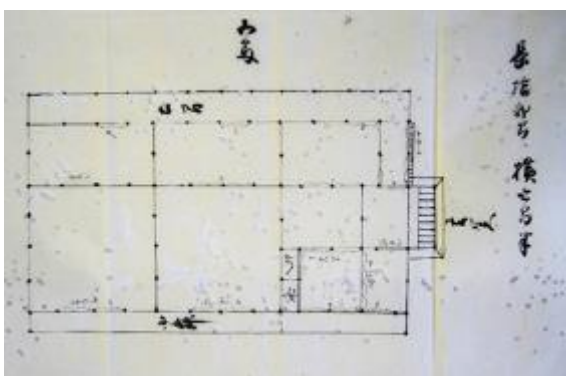
②二番長屋



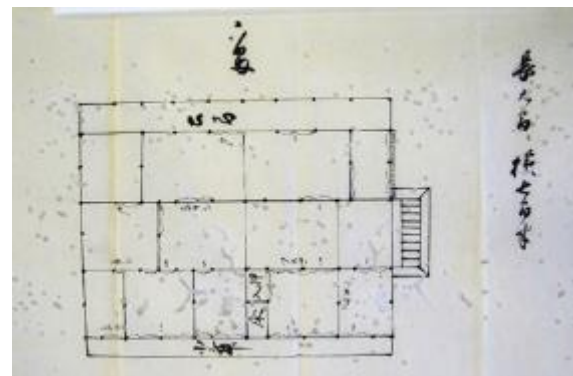
③三番長屋



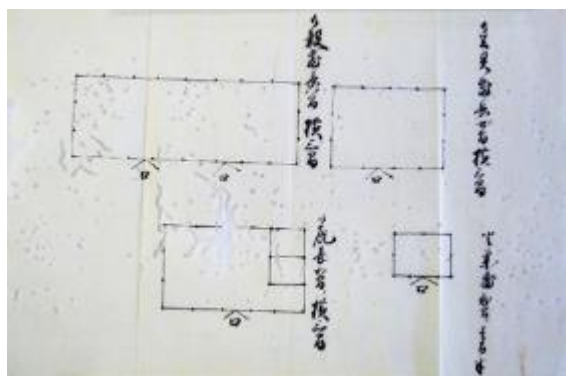
④四番長屋



⑤五番長屋



⑥御勘定所



⑦兵粮藏・御馬屋・稽古屋

参 考 文 献

- 河野常吉(1916)「白老の仙臺陣屋址」『北海道史附録地圖』
財団法人アイヌ民族博物館(2003)『アイヌの足跡』
佐藤宏一(1975)『東蝦夷地仙台藩陣屋考』
佐藤宏一(1995)「白老元陣屋管見」『仙台藩白老元陣屋資料館報第1号』
佐藤宏一(2010)「仙台藩白老元陣屋絵図管見」『仙台藩白老元陣屋資料館報第15・16合併号』
白老町教育委員会(1996)『史跡白老仙台藩陣屋跡環境整備事業報告書』
白老町教育委員会(2001)『白老町の文化財ガイドブック』
白老町教育委員会(2021)『史跡白老仙台藩陣屋跡保存活用計画』
戸祭由美夫(2018)『絵図にみる幕末の北辺警備 五稜郭と城郭・陣屋・台場』
松木覚(1978)『北に生きる武士団』



「白老元陣屋全景」

ドローンde街おこしプロジェクト撮影(令和元(2020)年10月)

書籍名 ふるさと再発見シリーズ5「白老元陣屋を描いた絵図面」

発行年月 令和3(2021)年3月

発行 仙台藩白老元陣屋資料館

TEL&FAX: 0144-85-2666/E-mail: jinya@town.shiraoi.hokkaido.jp